

ピランデルロとドイツ

ルイジ・ピランデルロ (Luigi Pirandello, 1867-1936) はローマとボンと二つの町で学生々活を送った。彼は一八八八年にローマ大学に登録し、翌一八八九年にはボン大学に登録している。彼が僅か一年でローマ大学を去らねばならなくなったのは、彼とラテン文学のオノラート・オッチオーニ教授との関係が面白くなかったことからである。オッチオーニが教室でプラウトの喜劇を読み誤ったのを若いピランデルロが指摘した為に、彼はオッチオーニの怒りを買ひ、ローマで勉強を続けて行けなくなったばかりか、イタリアの他の大学にも行くことが出来ないような窮地に陥った。この時ピランデルロを救ったのは有名な言語学者エルネスト・モーナチ教授である。モーナチはピランデルロにドイツ

ピランデルロとドイツ (山口)

山口清

ツの大学に行くことをすすめ、ボン大学の言語学教授ヴェンデルン・フェルステルに宛てて温い紹介状をしたためてくれた。ピランデルロはモーナチの温情に深い恩義を感じ、その後常に彼に敬愛と信従の誠意を披歴することを怠らなかつた。父ドン・ステファノも息子ルイジを誇りとしていたので彼のドイツ留学に賛成した。

ピランデルロはドイツへ出発する前に、当時パレルモにあった父の家に帰っていたが、その間にモーナチの為にジルジエンティまで出かけ、そのルツケージ・パルリ記念図書館にある古文書を調査し、それに関する報告的な書簡を一八八九年九月十三日附でパレルモからモーナチに送っている。その書簡の中で彼はドイツへの出発に就いて次の

ピランデルロとドイツ（山口）

ように書いている。

『私は今ドイツへ出発する準備をしています。二十六日にはきつとローマにいます。然るべき時にボンに着きたいと思っていますので、ローマには三日以上はとどまらないでしょう。先生に是非お目にかかりたいと願っています。私が、私にこのような喜びを樂しむことが許されるかどうか、誰が知るでしょう。でも私はそれを願っています。』

ピランデルロがドイツへ行く途中、これほどまでに逢いたがっていたモーナチには遂に逢うことが出来なかった。それはドイツへの道を急いでいた彼がローマで病気になる、意外に長くローマで病臥しなければならなかったことによる。十一月十四日附で彼がボンからモーナチに宛てた書簡には次のように書いてある。

『ローマで先生にお目にかかれなかったことは残念の極みでした。なぜなら私は十二日間も病の床によこたわってなければならず、従ってフェルステル教授宛の紹介状のことで先生に心から御礼を申すことが出来なかったからで

す。』

また同じ書簡の中で彼はフェルステル教授に優しく迎えられたことや、ボン大学の自分の研究の計画などに就いて、次のようにつたえている。

『既にフェルステル教授のもとに行つて来ました。彼は私を非常に優しく迎えてくれました。我々は先生に就いて沢山話しました。それから私は自分の計画を彼に告げ、私が前にやった研究に就いても詳しく彼に話しました。彼は今後出来るだけの援助と指導とを与えることを私に約束しました。私は彼の忠告に従つて、「ジルジエンティ地方の言葉」(Parlata della provincia di Girgenti)に関する研究に注意深くとりかかりました。私は「寓話、民謡、即興歌」(Fiabe, canti popolari e improvvisi)の大きな蒐集をここに持っています。それらは私が自分で集めたものであり、今や私の研究の基礎として役立つでしょう。私はその蒐集を私の研究への附録として出版させるでしょう。』

この書簡は右にイタリア語で示された部分を除けばドイツ語で書かれていて、ピランデルロがこの時までどの程

度までドイツ語に上達していたかを知る為の興味ある資料ともなる。

一八九〇年六月二十四日附で彼がボンからモーナチに宛てた書簡によれば、次のようなことを知ることが出来る。ピランデルロはドイツへ出発する前パレルモでも心臓病をわずらったが、その病気がボンで再発し、研究にも支障をきたすようになった。そこで彼はしばらくイタリアに帰って静養することを決心した。然しこのことをフェルステルに打ちあける勇氣はなく、許可を受けることなしに帰国した。途中ポローニャに立ち寄り、ムルリと言う人を訪ねたが、ムルリはピランデルロにしばらく本から遠ざかるように忠告した。彼は郷里に帰り、約三ヶ月静養をした後に再びボンに向って出発した。然し病氣は全快した訳ではなかった。彼は病氣と戦いながらも研究を続け、マイエル・リユプケの「ロマンス語の文法」を殆んど訳了し、また十八世紀のイタリアの諧謔的な詩人チェッコ・アンジョリエーリ、フォルゴレ・ダ・サン・ジエミニャーノ、チエーネ・デルラ・キタルラなども研究した。これらの翻訳や研究も

ピランデルロとドイツ(山口)

後で出版する意図を以ってなされていた。「ジルジエンテイ地方の言葉」の研究に就いては次のように書いてある。

『私の方言学的研究を再び始める為に近くフェルステル教授に逢うでしょう。その研究の為に今や完全にすべての資料をそろえています。私はそれをドイツ語で書くでしょう。それは私の卒業論文となるでしょう。確かに御存知ないと思いますがここドイツではロマンス語学に於いてドクトルの学位を得る為には自然科学と数学の試験も受けねばなりません。』

ピランデルロは学位を得る為の自然科学と数学の試験のことは頭をなやましていたように思われる。

一八九〇年九月七日ボンからモーナチに宛てた書簡の中で彼は次のように書いている。

『卒業論文を書き終りましたので、それに就いてお知らせしなければなりません。……言語学の論文の例証として、私は附録の形式で地方の村々の民謡や民話の短い蒐集を付け加えました。』

うまく出来たと信じています。フェルステル教授が結局

私に彼の評価を再び与えてくれることを望んでいます。』

同じ書簡によればフェルステルはその頃ライプチヒへ旅行していたことが分る。

『先生は、彼がまだボンにとどまるのであるか、それとも人が噂しているように、来る十月にはライプチヒへ行くのであるか、どちらであるかをご存じですか。若しも彼が行くとすれば、私もまたボンを去って半ケ年ライプチヒの大学に通わねばならないでしょう。そこでは私の悩みの種である数学、博物、理論哲学、道徳哲学の試験免除と言う便宜を持ちながら私の卒業試験を受けるでしょう。そして若しもそこで講師としてイタリア語を教える任務を得ることに成功すれば、私は極めて満足に思うでしょう。』

フェルステルは、一年前、私が最初に彼を訪問した時に、若しも私がその時もつと経験を積んでいたら、ここボンでもこのような任務を私に与えさせることが出来たであろうと言いました。』

然しフェルステルはボンに帰った。そしてピランデルロはライプチヒの大学に移る必要がなくなった。然し自信の

ない物理と数学の二つの試験を受けねばならないことになった。モーナチに宛てた日附のない書簡の中には次のように書いてある。

『フェルステルは私の論文に大して難点を見出しませんでした。それで私は彼の指図に従い、暗示された訂正をなした上で、間もなくそれを印刷に付することが出来るでしょう。』

ドイツ語で書かれた彼の卒業論文は「ジルジェンティの方言の音と音の発展」(Laute und Lautentwicklung der Mundart von Giringenti)と題し、一八九一年三月二十一日の日附を以ってボン大学に提出された。出版はハルレでなされている。これには当時の習慣に従い、ラテン語で書かれた自伝的な短文も添えてある。

この論文が出版された時、これは「ロマンス語の文法」の著者マイエル・リュプケの注目と批評を受け、同年十一月十一日「ゲルマン・ロマンス語学の為の文学雑誌」(Literaturblatt für Germanische und Romanische Philologie)第十二号の中に公表された。

若しもピランデルロがこの後文学の創作に転向しなかつたならば、彼は言語学の分野でも相当な学者となることが出来たかも知れない。然しシルジェンティの方言に関する彼の研究は彼が後にシチリア方言の劇を書いた時に非常に役立つ。また言語学的研究の資料として蒐集されたシチリアの民話が、後に彼が書いた数多くのシチリア的短篇への刺激となったことも想像に難くない。

創造的なピランデルロの精神の中には常に創作への意欲が燃え立っていた。言語学の論文が発表された一八九一年にはミラノで彼の第二の詩集「ジエアの復活祭」(Pasqua di Gesù)が出版された。この詩集は彼がボンで知り且つ愛したブロンドの少女エンニー・シュルツ・ランデルに献じたものである。帰国した後一八九五年には詩集「ラインの悲歌」(Elegie Renane)が出された。これはボンに於ける彼の生活に取材したものであり、中に含まれている一篇「恋人への別れ」(Addio all'Amata)は、ライン河のほとり、雪におうわれた小路の上での恋人との悲しい別れを歌ったものである。「ラインの悲歌」の題名はゲーテの「ローマ

ピランデルロとドイツ (山口)

の悲歌」から暗示を受けたものと思われる。なぜなら翌一八九六年には「ローマの悲歌」の訳詩 (Elegie Romane) が出された。

ボン大学での学業を終えたピランデルロが何時イタリアに帰国したかは明らかでないが、一八九四年にはイタリアでマリア・アントニエッタと結婚しているからそれ以前に帰国したことは間違いない。卒業後ボン大学でイタリア語の講師を勤めたとも伝えられているが、はっきりしたことは分らない。病身であった彼は卒業後間もなくイタリアに帰国したであろうと想像される。(一九五六・七・七)

参考文献

- (1) L. Finazzi Agrò: Pirandello studente universitario. Nuova Antologia, 1943, 1° aprile, p. 143-149.
- (2) Giuseppe Cocchiara: La "Tesi di Laurea" di Pirandello. Retrosena, Rivista letteraria degli spettacoli e delle arti, 1938, 10 dicembre, Fascicolo Pirandelliano, p. 39-40.

K. Yamaguchi, Pirandello e la Germania

Uno dei più importanti periodi della vita di Luigi Pirandello è quello trascorso in Germania. La sua carriera come studente universitario fu cominciata a Roma, ma egli rimase là soli due anni. Poi si recò all'Università di Bonn, dove guidato dal Prof. Wendelin Foerster seguì studio filologico e fu laureato. La sua tesi di laurea, scritta nella lingua tedesca, fu uno studio del dialetto di Agrigento, sua terra nativa. Quando era in Germania la sua "Pasqua di Gea" fu pubblicata. Alcuni poemi composti a Bonn furono pubblicati a Roma dopo il suo ritorno in Italia nel volume intitolato "Elegie Renane."

K. Masuyama, Il mondo del Boccaccio

Per cercare di capire il mondo del Boccaccio è necessario chiarire il carattere del pensiero del trecento; in questa tesi tratto, perciò, l'atteggiamento del trecento di fronte al problema del rapporto tra fede e ragione, di fronte alla cultura grecoromana, di fronte all'idea di Dio e della sorte dell'uomo.

Il carattere più notevole di questo periodo è l'esame a cui per la prima volta il pensiero umano sottopone questo mondo e quello soprannaturale presi separatamente e non considerati come convergenti verso uno stesso fine. Si comincia a scoprire la ragione ed a considerarla ancora una volta, dopo secoli, come pietra angolare dello sviluppo dell'umanità da una parte, e dall'altra si comincia ad apprezzarla nel suo intrinseco valore. Ed è questo che fa il trecento un gran secolo.

E. Shibayama, Corrispondenza tra Machiavelli Vettori

In this paper, I trace the movements of Niccolò Machiavelli soon after his retirement to San Castiano in 1513, through his correspondence with Francesco Vettori, an old friend of his, who held a political position of considerable importance in those days. Their correspondence treats first of their political and diplomatic views, revealing their patriotic ardor, and secondly of their search for employment and their love affairs.

His letters, which have been treated rather lightly, must be reexamined as a clue to the political situation of Italy in those